

カンボジア・西トップ遺跡の調査

カンボジア・西トップ遺跡の修復事業は、コロナ禍の間も現地スタッフと連絡を取り合いながら進められており、現在は中央祠堂の屋蓋部の再構築を進めています。また、再構築にともなう調査研究も進められており、2023年2月、3年ぶりに日本から現地へ行き、発掘調査と建造物調査をおこないました。

2019年度までの調査で、西トップ遺跡の中心建物である中央祠堂・南祠堂・北祠堂の解体調査が完了し、祠堂部分の変遷がほぼあきらかになっています。残るは中央祠堂前面の東テラスのみです。

東テラスは石材の大きさや形状の違いなどから、中央祠堂に遅れて増築された部分であると考えられています。これまでの調査で、東テラスの下層には砂岩の石敷遺構とラテライト石列が検出されており、東テラスの前身遺構の存在が想定されていました。今回は、2019年度に確認したラテライト石列がどこまで続くのかを確認するため、東テラス北側面の外装石を外し発掘調査をおこないました。前回確認したラテライト石列は東テラスを構築する前に造られたものとの想定をしていましたが、今回の調査ではこの石列が現在の東テラスに沿って敷かれていることがわかりました。この石列が現在の東テラスと同時に造られたとすると、これまでの見解と年代的に矛盾が生じます。したがって、①東テラスの構築時に既存のラテライト石列を延長しているか、②現在の東テラス構築以前に、同規模のテラス状の遺構があつたものを造り変えたのではないかと考えています。

今後はさらに東側の東テラス前面部分を調査し、東テラス構築の過程をあきらかにしたいと思います。

(文化遺産部 大林潤)



西トップ遺跡の調査の様子（北東から）

育成林業に関する文化的景観研究会の開催

奈良文化財研究所景観研究室では、「京都中川の北山林業景観」（京都府京都市）の価値をあきらかにする調査や、重要文化的景観「智頭の林業景観」（鳥取県智頭町）の整備計画策定に向けた価値の再検討のための調査を、各市町からの依頼のもと実施してきました。その中で感じたのは、山林のみの価値ではなく、それを担ってきた集落も含めた価値付けが必要であるということ、それは絶対的価値でははかれないもので、典型性や独自性を求めるには比較研究が欠かせないということでした。また、文化的景観では、農業を主産業としてきた地域は「農業景観」ではなくて「農村景観」と呼ぶのに対して、林業に関わる地域では「林業景観」と呼びます。それは、前者がムラ（民居の一集団）とノラ（耕作する田畠）とヤマ（利用する山林原野）を一体としてとらえてきたのに対して、後者はヤマだけをとらえがちだったことも理由にあると考えられます。

そこで、スギの育成林業を主産業としてきた地域を対象に、文化的景観という観点からどのようなことが見出されるのか、その保全はどのようにできるのかについて議論する場として、2023年3月9日に文化的景観研究会を開催しました。研究会では、「遺産として見出される林業景観」（奥敬一／富山大学）、「近代日本のスギ主産地と文化的景観」（恵谷浩子／奈文研）、「景観変遷にみる北山・智頭・飫肥林業地域の特性」（竹内祥一朗／奈文研）、「山の風景の多様性－計画制度から保全活用を考える」（小浦久子／神戸芸術工科大学）という4つの報告の後、ディスカッションを実施しました。

議論の中で、針葉樹の育成林業は近世に生まれたものの、それは局所的なものであったこと、近代になり新政府による統括的な林政がスタートして、用途が途絶えた草山や柴山が拡大造林の対象となり、さらに戦後には薪炭林や奥地の天然林の針葉樹人工林化が進められたこと、などが話題にあがりました。針葉樹の育成林業は一部の伝統的林業地帯を除いて非常に新しい営みであり、持続的なものとなっているわけではなく、文化財の価値として捉えるには引き続き検討を進めていく必要があると考えています。

(文化遺産部 恵谷 浩子)